

NAGASAKI  
じんけん歴史散歩  
西彼杵半島コース

西彼杵半島を  
フィールドワーク  
する

NPO法人 長崎人権研究所





# 西彼杵半島 マップ



## 1 時津港(大村湾)



長崎空港への船が発着する時津港には、「日本二十六聖人上陸の地」記念碑が建立されている。秀吉は1587年（天正15）伴天連追放令を発したが、キリスト教が弾圧されるようなことはなく、むしろ容認されていた。しかし、1596年（文禄5）イスパニア船サン・フェリペ号事件の余波で秀吉は、大坂や京都にいた宣教師や信者の処刑を命じた。26人は、1カ月かけて陸路で山陽道、長崎街道を歩き大村湾の彼杵に到着、ここから船で時津に渡っている。時津からは時津街道（浦上街道）を歩かされラザロ病院があった山王神社で休息を取り、翌朝西坂に送られたという。

また、大村湾に浮かぶ鷹島には、「鷹島殉教記念碑」が建てられている。碑文によると、宣教師ナワレト、エルナンドと伝道者レオ田中が1617年6月ここで処刑された。これら宣教師は、長崎にあった被差別部落・皮屋町に礼拝所を作り布教を行ったことを示す手紙が残されている。「この機会に殉教者から生じた二番目の大きな偉業は、獣類の皮をはぐことを職業としている皮屋の上におこったことです」と記述され、この手紙を送ったハシント自身も「長崎のこの憐れな皮屋の人々の世話をした宣教師の一人である」とされている。

（参考；「ハシント・サルバネス書簡」1620年）

## 2 渕龍山天福寺・皇太神宮



〒851-2202 長崎市樺山町887

「三度岩屋山に登れば、樺山（赤岳）に一度巡礼したことになる。三度樺山に巡礼すれば、一度ローマのサンタ・エケレジア（教会）に巡礼したことになる」と言い伝えられた潜伏キリスト教の聖地樺山には、天福寺という禅宗のお寺がある。1688年（元禄元）の開基で、町を縦断する道路の東側に位置する。江戸時代この町は、大村領と佐賀藩深堀領に分かれており、住民のほとんどがキリスト教であった。

天福寺は深堀領に位置し、信徒は「カクレキリスト」との信仰を最近まで受け継いでいた。カクレキリストとは、表向きは仏教徒を装いながら、密かにキリスト教を信仰した人々をいう。

天福寺では、2011年（平成23）10月壇信徒会館（福聚殿）が落成した。この会館には、仏教のお寺であるにもかかわらず、カクレキリストであった家々に伝わる聖具であるメダイやクロス等の展示コーナーが設けられている。塩屋秀見住職はこのことについて、カクレキリストの人々が寺を守ってくれた歴史として伝えないといけないという。





## 4 遠藤周作文学館



〒851-2327 長崎市東出津町77番地 TEL 0959-37-6011

角力灘（五島灘）を望む外海町の一角に建てられた遠藤周作文学館、小説『沈黙』の舞台であり、主人公ロドリゴが捕らえられた五島の島々がはるか彼方にある。寛政年間（1790年代）外海地方の潜伏キリストンたちは、「五島はやさしや、土地までも」と歌い数千人が五島の各地に移住したとされる。彼らは「ひらき」と称され、海に面した斜面地を切り開き、耕作地とした。明治の初年には「五島崩れ」を経験している。

遠藤文学館は、2000年（平成12）5月、3万点にも及ぶ遺品・生原稿がご遺族から寄贈され開館した。館内には、遠藤周作の作品（生涯）を紹介する常設展示場があり、作品の開架閲覧室で自由に読書を楽しむことができる。また、企画展も行われる。

平成22年5月～約2年間は、第6回企画展として〈「遠藤周作と映画」—小説家になった映画少年〉が行われている。









## 8 崎戸歴史民俗資料館



〒857-3101 西海市崎戸町蛎浦郷1224-5  
TEL 0959-37-0257

西海市崎戸町は西彼杵半島北部にあり、九州本土から五島列島に飛び石のように連なる4島（蛎浦島、崎戸島、江島、平島）からなる。江戸時代には捕鯨が盛んであった。その後、明治末期になると三菱系の炭鉱ができ最新技術で海底から石炭を掘り出していた。炭鉱全盛期には人口も25000人だったが、今はその1割程度になっている。町のあちこちに炭鉱住宅であったアパート群などが廃墟となり残っていたが、近年「修景」が進み、近代化産業遺産が姿を消している。現在の町の基幹産業は製塩業であり、九州でただ一つの製塩工場は全国の30%シェアを持っているという。

崎戸町の歴史を紹介する施設として、崎戸歴史民俗資料館が1989年8月に開館した。捕鯨や石炭で栄えていた当時の資料、製塩産業、文化・歴史等を展示し、町のパノラマ模型・ビデオコーナー・坑夫の生活・塩の工程模型などを置いている。また館内には、作家・井上光晴の文学室が設置され、小説原稿や同人誌など貴重な資料が展示されている。『地の群れ』や『明日』などの作品を遺した井上は少年期をこの町で過ごしている。

## 9 井上光晴文学室



崎戸歴史民俗資料館には、2004年（平成16）10月、井上光晴文学室が開設された。同年、隣接する炭鉱記念公園には「のろしはあがらず のろしはいまだあがらず」という井上の詞を刻んだ文学碑が建てられた。文学室の入り口には、井上本人作成の年譜と川西政明作成の年譜が上下に飾られている。両者には違いがある。真向かいに井上の写真と埴谷雄高（はにや・ゆたか）の「全身小説家、井上光晴」という文書が掲げられ、展示コーナーに入る。「『過去から未来を繋つ思想の枝』—崎戸、佐世保、長崎での原体験」というコーナーで、崎戸—『長靴島』（昭和28年）『妊婦たちの明日』（昭和39年）、佐世保—『書かれざる一章』（昭和25年）『重いS港』（昭和27年）、長崎—『地の群れ』（昭和38年）等の作品解説が行われている。顕彰（文学碑）展示コーナーや作品すべてを集めた図書コーナーもあり、ビデオコーナーでは井上の映像や、文学碑建立の際の瀬戸内寂聴の声を聞くことができる。

## 長崎一『地の群れ』のパネル

阿南重幸（長崎人権研究所）

2005年1月6日、私たちは研究所機関誌『もやい』の取材のため、崎戸歴史民俗資料館を訪れた。『もやい』では「文学の舞台を訪ねて」というシリーズが企画され、崎戸町は第一回目の舞台とされた。作品は井上光晴の『地の群れ』である。04年10月に文学碑が炭鉱記念公園に建立され、資料館には井上光晴文学室が開設されていた。

ところが、ここで私たち一行は、思いがけない出来事に出くわすことになる。文学室に掲示されているパネルに「18年間に形成された錯覚（乱）」から引用された一文があり、その文章がなんとも気になったのである。

「長崎のピカドンでやられた家の娘は年ごろになっても嫁にいかれんよ。長崎から移ってきた孤児や、人々のことをみんなとまらん部落のもん、とまらん部落のもんとよんどるけんねえ。とまらんとは血のとまらんことたい。あそこの部落のものはエタと同じじゃというて、みんな嫁にもいけん」

『地の群れ』は井上の代表作ともいるべき作品で、海塔新田という被爆者の住む場所が創られ、被爆者、被差別部落民、在日コリアン等、当時の彼らに対する差別の有り様が描かれた小説である。したがって、いわゆる差別用語である「エタ」という言葉が登場してもおかしくはないし、むしろその表現は欠くべからざるものであろう。ではあるが、当時の被爆者に対する視線がかくきびしいものであることを強烈に感じさせるために、被差別部落民に対する差別が重ねられている。この文章自体は、『地の群れ』ではなく、『手の家』という他の小説に書かれた文章である。

このパネルの表現が一人歩きすることがあるとしたると考え、研究所ではこの展示を考える「ミュージアムの展示を考える」というセミナーを開催した。部落解放同盟長崎県連は、「賤称語」を使ったパネルの展示についてどのような議論があったのか申し入れを行った。

長崎新聞は、「展示パネルに賤称語 部落解放同盟指摘 注釈付け補足へ」との記事を掲載した。最終的に西海市教育委員会は、文学室の入り口に、「皆様へ」というパネルで「井上光晴作品の根底には、虐げられている人々に身を寄せながら、そのような社会の様態を是正しなくてはいけないという強い思いがあります。私たちは、そのような井上作品を鏡として自分の心を映したり、井上作品を砥石として心を磨いたりすることを願っております」という説明文を、問題のパネルの横には、「お断り」の文章を掲示した。

### お断り

パネルに紹介している井上光晴の言葉には、井上の造語「とまらん部落」賤称語「エタ」の不当・不適切と判断されるものがあります。これをあえて原文のまま提示しましたのは、井上光晴の文学観や思想を理解してほしいと考えたからです。

作品『地の群れ』は、当時の原爆被爆者の出口のない状況と被差別部落の人々の痛みを重ね合わせて描くことにより、逆に、その状況を解放する手段を読者に発見してもらいたいという意図から書かれたものです。多くの皆様が『地の群れ』をはじめとする井上作品に触れ、人権について考えていただくことを願っております。





## 西彼の石炭

前川雅夫（炭坑・民衆史研究家）

西彼半島の島々には江戸時代の終りから1970年代までの約百年、炭坑があった。はじめは地元の人が石炭を掘り、漁火（いさりび）や風呂焚きに使った。瀬戸内海の製塩業で使ったのは江戸時代の終りからである。塩分3%の海水を塩田で6%に濃くし、釜で沸騰させると16%で塩の結晶ができる。これをすくい取って乾燥させ、塩俵に詰めて売った。帆船で石炭を買いに来るので、高島・松島では数十人、数百人が働く炭坑ができた。

明治になって汽船・汽車・工場・製鉄所で大量に使うようになると、大会社が炭坑を買いとて大きくした。高島・端島・崎戸は三菱、松島・大島・池島は三井系である。海底の石炭を採掘するには巨大で複雑な設備が必要で、経費の半分は人件費だ。その巨額な資金を金持ちから集めて会社をつくり、利益の分配を約束したところに無理があった。

当時は技術力が低く、地下に石炭がどれだけあるのか、確実に利益が出るのか、わからなかつた。それで早く利益を上げようと無理な経営をした。ガス爆発や落盤事故（地下の坑内で大きな石が落ちてくる）で多くの死傷者がでた。高島では、自由のない長時間の重労働が「坑夫虐待」として社会問題になり、暴動やストライキがたえなかつた。大正時代には香焼炭坑で労働組合ができ（鈴木文治の友愛会系）、戦後の炭坑は労働運動でも「エネルギー源」といわれたほどである。

石炭は産地で性質が違い、燃料用・製鉄用などに使いわかる。崎戸の石炭は両方に使い、高島・端島は最高級の製鉄用炭（原料炭）である。製鉄用炭はコークス（炭素のかたまり）にして溶鉱炉に入れ、鉄鉱石を燃やして鉄にする。

大正から昭和にかけて普及した電気は、発電機を回転させて作る。石炭を燃やし、蒸気の力で回転させるのが石炭火力発電所。上から下へ落ちる水の力で回転させるのが水力発電所である。

昭和になって日中戦争が激化すると、炭坑では若者や熟練坑夫が軍隊に取られて人手不足になった。とくに昭和14年は雨が少なく、水力発電は不調であった。石炭火力で補うにも人手不足で石炭が足らない。そこで雨不足で仕事ができない朝鮮半島の農民を雇つた。しかし翌年には帰つた。炭坑は戦争が続いて労働力不足がひどくなるばかり。それが朝鮮・中国からの百万人ちかい「強制連行」の原因である。

日本の石炭産業の最盛期は1940年（昭和15）と1965年（昭和40）頃である。全国で約40万人の炭坑労働者が年間5000万トンの石炭を掘つた。長崎県は人口でも経済力でも日本の1%だが、石炭は10%の4万人、500万トンである。県内は西彼炭田（西彼の島々）と北松炭田が半々で、それぞれ炭坑労働者2万とその家族がいた。炭坑で働いたのは主に農漁村の二・三男。それに没落士族や復員兵など、時代の変化で新職場を求める人たちだった。

まだ海底には多くの石炭が埋蔵されている。明治に人口三千万の農業国だった日本が経済大国になれたのは、石炭と水力を自給できたからである。しかしエネルギーは国産から輸入（石油・原子力・石炭）に変わつた。

炭坑の遺跡はわずかだが、「エネルギー不滅の法則」で、石炭は鉄や電力・セメントになって日本の繁栄を築いている。また炭坑の労働運動や政治活動は、日本人の生活や福祉を向上させた。このように石炭と炭坑の人たちのおかげで今の日本がある。



西の丘陵の丸山には遊廓があった。上町・下町と丸山を隔てる小川にかかる石橋は「思案橋」と言われ、遊廓に訪れる男たちが「行こうか、戻ろうか」と考えこんだことからこの名が付いたという。横瀬浦にあった地名や橋が、長崎市にあるもののルーツと言われている。



思案橋跡



フル  
ロイ  
イス  
ス・

1563年ポルトガル出身のイエズス会宣教師ルイス・フロイスは、横瀬浦を訪れた。以後、1597年26聖人の殉教を見届けた後長崎で亡くなるまで、30数年を日本で過ごし、日本へのキリスト教伝来から布教の歴史（1549年～1594年）について、『日本史』を執筆した。当時のキリスト教関連の資料はそのほとんどがなくなってしまっており、同書は貴重な歴史書である。フロイスは、京で信長や秀吉等とも会見し、また、大友宗麟や大村純忠らの記述を多く伝えている。



横瀬浦の港口にあるハノ子島。  
頂上の十字架を目印にして船が  
入港してきたという。



史跡公園





ご協力いただいた方（団体）

園田尚弘（長崎大学名誉教授）

田中良彦（作家・中学校教諭）

前川雅夫（炭坑・民衆史研究家）

西岡由香（漫画家）

西海市教育委員会

他

デザイン／カット 西岡由香

ガイドブック

**西彼杵半島をフィールドワークする  
—遠藤周作と井上光晴の文学を訪ねて—**

2012年3月20日発行

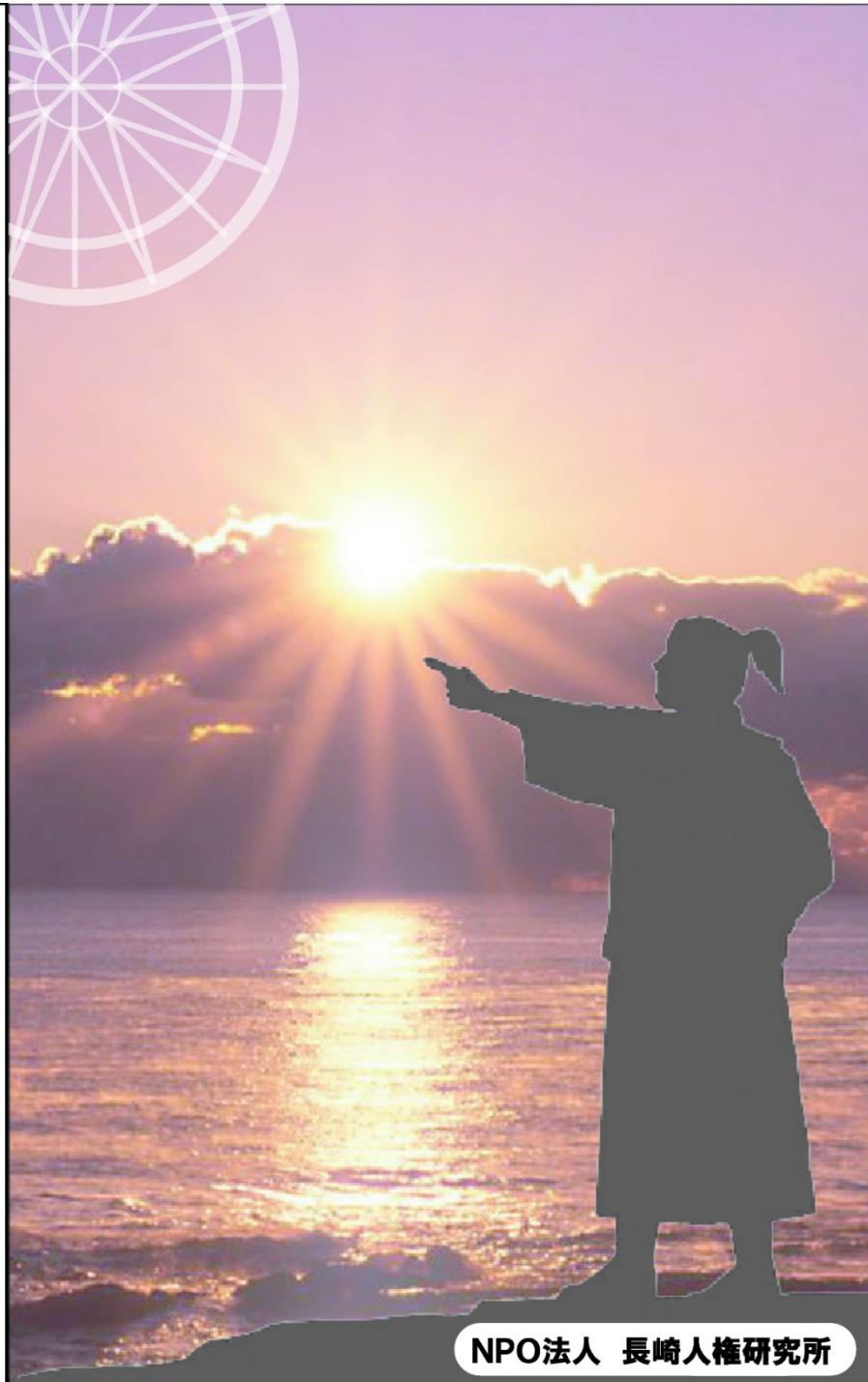
NPO法人 長崎人権研究所

〒850-0048 長崎市上銭座町2番7号

Tel 095(847) 8690 Fax 095(847) 8696

E-mail anan@sings.jp

<http://homepage3.nifty.com/naga-humanrights/>



NPO法人 長崎人権研究所